

—輝く農業人—
きら星

農業という仕事に
プライドを持つ

足立区辰沼
宇佐美 一彦さん
(55)



【プロフィール】

あだち菜の郷フレオープンでお客様第1号の手にカゴを渡す宇佐美さん

1年を通して小松菜を主として30種類の野菜を栽培し学校給食のほか、自宅とJAの直売所で販売しています。父母・妻・長男の5人家族。



今回、取材をした宇佐美一彦さんは、区内小中学校25校と契約し年間を通して小松菜やキュウリなどを納めるほか、庭先販売やJAの直売所へ野菜を出荷しています。

学校給食へ納めるきっかけは13年前に自宅近くの小学校の先生から小松菜を食育に使用したいという依頼でした。その後、栄養士の紹介で納める小学校が6校になり、月に1回行われる栄養士の会合で小松菜の話が口コミで広がって更に16校に増えたとき、足立区教育委員会が動きました。区長から区内小中学校107校に小松菜を入れて欲しいと要望がありました。1人で全校への配達は無理なので、青壮年部の仲間6人に声を掛けエリアを分けて担当し納品することにしました。このとき、担当するエリアではなくなった小学校の児童から「宇佐美さんの小松菜をもう一度食べたい」と言われ、どうすれば良いかと考え、小松菜ペーストを作ることになった。ペーストは加工会社へ宇佐美さんが小松菜を持っていき、加工されたものを食品会社が各校へ配送します。現在、小学校では栄養士が小松菜ペーストを良く使ってくれるようになりました。

また、昨年給食に導入された小松菜パンは、このペーストを使ったもので全ての工程を足立区内で行いたいというこだわりのため、パンが出来るまでに2年かかったそうです。

このほか、JA東京スマイルの取り組みとして毎年11月頃に足立・葛飾・江戸川の公立小中学校へ小松菜を無償配布する『小松菜一斉給食』で地場野菜の品質の良さを知った栄養士が区内産の小松菜を指定するようになったことも学校給食の使用が増えたきっかけの一つと宇佐美さんは話します。

学校には、ほぼ毎日小松菜などを納めています。昨年天候不順で野菜の生育が悪く高騰した時には、生産者としての矜持にかけて品が無いから簡単に納品できないと言いたくないという思いで発注のあつた学校に普段通りに納めました。

宇佐美さんの農業へのこだわりは誰もが認めるもので、足立区で初となるJAの農産物直売所あだち菜の郷のオープンに向けて5月に行われた足立直売部会設立総会で部長に選任されました。直売所の目指すものは「部会員の皆が丹精込めた野菜を区民に食べて笑顔になつてもらいたいこと。そうすれば、食べておいしいと感じた人が、また買いに来たり口コミで地場野菜の良さを広げてくれる」と思いを話してくれました。

学校給食や直売所など毎日忙しい日々を送る中で趣味はなんですかと聞いたところ「仕事」と笑いながら答えてくれました。農業という仕事に矜持を持つて行かう宇佐美さんの笑顔はとても輝いていました。



今年の春に大学を卒業後、就農した長男の大(まさる)さん(奥)と撮影